

わたしの中にいる何かー心が蛇に、なるー

はじめに（承前・お連れ様怪談、その後ー怪談とジェンダーバランス）

## 1 「蓮華温泉の怪話」

『怪奇伝説 信州百物語』昭和九年五月一〇日発行）

白馬岳の山ふところに蓮華温泉というも名ばかりの一軒家が、鬱蒼たる杉林にかこまれて、寂しく立っている。湧出量も相当に多く、山峡の気はこの上なく澄み切っているが、不便を厭ってか浴客は誠に少ない。

明治も三十年を数えて、その年の秋のことであった。浴客もすっかり山を下って、宿はもう冬籠もりの準備をしようとしている頃であった。ある月の美しい夜、ほとほとと宿屋の戸を叩く音がした。主人はその時、囲炉裏のほた櫓火に山鳥を焼いてたが直ぐに

「どなたか」と、声をかけて見た。

「一寸あけてくれませんか。山路に迷って閉口しているんです」確かに男の声だ。

主人は戸を開けた。そこには青白い月光の中に、洋服姿に鳥打帽子の紳士が一人立っていた。

「どうも有難う。今夜は泊めて貰えるでしょうね」

男は微笑を浮かべながらこういったが、何がなしそわそわ落ち着かぬ風が見えぬでもなかった。

「泊っておいでなさい。そのかわり何の御もてなしも出来ませんよ」

「何それどころじゃない。泊めてさえ貰えれば結構です」

客は上がりがまちに腰を下ろして、靴の紐を解き始めた。

「旦那、今頃どうしてこんな所に来られたんです」主人は不審しそうに問うた。

「何ね、鉄砲を打ちに来たんですが、大事な鉄砲は谷に落とすし、道には迷う、いやどうも実に弱りましたよ。幸いにこの灯が見えたんでね。お蔭で生命拾いをしたというもんです」

「そりやどうも飛んだ目にお逢いなさった。時に旦那はどちらの方です」

「東京ですが、今朝は糸魚川口から登りました」

「そうですね。今山鳥を焼いてたんですが、よかったら、こいつで御飯をいかがです。それともお先にに御湯にお入りになりますか」

「それは物凄い御馳走だ。御飯の方を先にして頂きましょうか。何しろ腹がすいてやり切れない。」

客は炉端ににじり寄って、いかにも一安心したという容子、主人は早速食事の用意に取りかかった。主人はこの春妻を失って今年八歳になる男の子と侘びしい二人暮らしだったが、この時急に奥の部屋で子供のはげしく泣き出す声を耳にした。

「何を泣いているんだ、坊や」

食事の仕度の手を離して奥の部屋を覗いて見ると、子供は無花果の实のような真つ青な顔をしてわなわな身をふるわせていたが、父親の顔を見ると、ばね仕掛けのように跳ね起きて、しがみついた。

「父ちゃん怖いよ」そして子供は更に烈しく泣き出した。

「馬鹿だな。何も怖い事はないじゃないか。お前夢でも見ていたんだろう」

子供は首を頻りに振って、

「いいや、父ちゃん怖いよ、あの人が怖いんだよ」

と最前宿を求めて来た鉄砲打ちの紳士を指さしながら、尚もはげしく父親にしがみついた。

「あの人が―」

主人も何となく薄気味悪さを感じて、紳士の方を見ると、彼は囲炉裏端でうまそうに煙草をふかしていたが、別段に怖ろしい事もあるう道理がなかった。

「馬鹿だね、お前は。お客様だよ。あの方は、立派な旦那じゃないか。何が怖いものか」

「いいや怖いよ、怖いよ」

気がつくとき、この時裏口に当たって、宿の飼犬が二匹俄かに激しく吠え立てている。それが山峡の静寂を破って、反響して、思わず主人も身振るいするような物凄さだった。で子供を抱きしめながら、主人は考えた。

「畜生！うっかりするとあの洋服は狐かもしれないぞ、焼鳥の匂いに惹かされて、化けて来やがったんだ。」

で、果たして狐ならば正体を現わして逃げだすだろうから鉄砲を打って驚かしてやろうと、主人は子連れで裏口から、こっそり外に出た。そして鉄砲に弾丸をこめると、空に向けて一発放った。

それは恐ろしく大きな音で山峡に響き亘ったが、紳士は平気な顔で煙草を燻らしていた。

「狐じゃない」と主人は思い直した。が依然として犬は吠え出てるし、子供は火のついたように泣き止もうともしない。

「どうしたのです。狐でもいたのですか」

紳士に聞かれて、主人も仕方なしに頭をかいた。

「父ちゃん、あの怖いから帰しておくれよ。ねえお願いだからさ」

親一人子一人で、妻がいた時よりも一層熱愛している子供が、こうまで怖えるのを見ては主人も愈々決心しなければならなくなった。

「旦那、どうも誠に相すみませんが、お泊めする事が出来なくなりました」

「どうしてです」

「実は子供が旦那の事を怖がって仕方がないんです」

すると紳士は俄然顔色を変えてぶるぶる身体をふるわせ出した。

「お願いだから、そんな無茶をいわずに、今夜一晩だけ泊めて下さい」

「それがお泊めしたいのは山々なんです、今申し上げた通り、子供が怖がってこの通り

泣いているもんですから」

「困ったな」

「どうも私も困り切っていますが、どうぞお帰りになって下さいませんか」

紳士もこうまでいわれて見れば、止むを得ないと断念したのか、つと立って靴の紐を結びはじめた。そして戸を開くと、逃げるようにして、外の犬のけたたましい泣き声の中に飛び出して行った。すると小半時たつて、又もや表戸を猛烈に叩く者がある。

「開けてくれ」

然し主人は薄気味悪くなっていたので返事もしなかった。

「おいなぜ開けないのか。私は駐在所から来たのだ」

声は確かにs巡査に相違なかった。主人はバネ仕掛けのように跳び上がって戸を開けた。そこには亢奮したs巡査が和服姿で塔婆のように立っていた。

「お前の家に今しがた四十がらみの洋服の男が来なかったか」

s巡査の声は心なしか少しばかり上ずっていた。

「へえ、参りました」

「今もいるかい」

「いいえ、今しがた出て行ったばかりです」

「そうか、すまなかった」

いい捨ててs巡査は白樺の密林沿いに、山道の方へとつてかえした。それから間もなくだった。恐らく三十分とは経つまい。急にはげしく罵り騒ぐ人声がして、主人は何かしらソワソワした気持ちに、鉄砲を持ち出して戸外に走り出した。

すると向こうから最前の洋服男を縛り上げたs巡査が、額のあたりから血潮さえ流して、下つて来た。主人は呆然としていた。

「有難う、お蔭で捕えることが出来た」

「へえ、旦那、その男は何か悪い事をした奴ですか」

こう問うて男の顔を凝視めた時、男はぐんなりと首垂れて、主人の視線を避けるようすだった。

「ああ殺人犯人だ。越中で女を殺して遁げ込んで来たんだ。向こうの警察から手配があつて、ここまで追跡して来たんだが、いやお前のお蔭で私も手柄さ」

s巡査は顔一面に笑みを見せたが、人殺しと聞いて主人はゾツとさせられた。男は巡査に護送されて、山道の月光を浴びながら下つて行った。

主人は急に家に残して来た子供の事を思い出して急ぎ足に家に帰った。子供は未だ唇を紫にしてブルブル震えていた。そして父親の姿を見ると、いきなり跳び付いて来た。そして云った。

「父ちゃん、怖かったね。あれ見たろ」

「何を」

「何って、あの人が座ってる時にね——」

「何かあったのかい」

「あの人の背中に、血みどろの若い女の人が逆も怖い顔しておんぶしていたよ」

「えっ」

主人は総身に水をぶっかけられたように、ゾツとして思わず尻餅をついた。

「そしてね、あの人が出て行った時、その女の人フワフワ後から歩いて行ったよ。坊やの顔みてニタニタ笑うんだよ」

「小僧もう止める」

主人は真っ青になって子供を抱きしめた。犯人は間もなく死刑台の人となったが、

「悪い事は出来ないものです。あの女はいつも、血みどろの姿で私の背に縋り付いていて、ふり放そうとしても放れません、今でも冷たい手で私の首を締めつけます。こんな苦しい思いをするより早く死刑にして頂く方が余っ程ましです」と語ったそうである。

『杉村顕道怪談全集彩雨亭鬼談』

↓類話・杉村顕道「ウールの単衣を着た男」／三木大雲「オレオレ詐欺」など。

## 2 「和光ノ方便ニ依テ愛執ヲ離ル、事」

(『助説因縁集』卷之上、天和二・一六八二年以降成立?)

上総国高瀧ト云所ノ地頭、信心ニテ、熊野へ年詣シケリ。或年、唯一人ノ娘ヲ相具シ、彼ガ為トモ思ヒ、詣ケリ。此娘、ミメ貌、ヨロシカリケレバ、熊野ノ師ノ房ニ、某ノ阿闍梨ト云、若キ僧アリケリ。元、都ノ者也ケリ。此娘ヲ見、心ニ掛テ、何ニモ、忍ガタク覺ヘケル俣ニ、我淨行ノ志有テ、靈社ニシテ、仏法ヲ行ゼント思ヒ企ツルニ、浩ル悪縁ニ逢テ、妄念、禁ガタキ事、口惜ト思テ、本尊ニモ権現ニモ、此執念ヲ、止玉ヘト、祈請シケレドモ、日ニ随テ、彼面影ノ、身ニ立信<sup>ソウ</sup>テ、忘レガタク、何事ヲモ、覺ヘザリケレバ、所詮ハ、彼地へ立越テ、何事モ量ラント、思ヒヲキワメ、負打掛<sup>フヒ</sup>テ、アクガレ出テ、上総ノ国ヘゾ、下リケル。扱、鎌倉ヲスギテ、ムツラト云処ニテ、便船ヲ待テ、上総へ越ント、浜ニ打臥テ、休ミケル程ニ、歩ミ勞レテ、少シ睡ミタル夢ニ、見ケルヤウ、便船ヲ得テ、上総ノ地へ渡リ、高瀧へ尋往タリケレバ、主ジ出合テ、何ニシテ、下リ玉ヒタルゾト云。鎌倉ノ方へ、修行ニ罷リ出侍ツルガ、近キ程承リテ、御住居モ見奉ラントテ、参リタリト云。偕、種々ニ饗<sup>モチナシ</sup>応ケリ。頓テ、登ルベキ躰ニ申ケレバ、暫ク、田舎ノ様モ、見玉ヘカシ迎、留ケリ。本ヨリ、其志ナレバ、幸ト留リ、左右シテ、文ニテ、心ノ中ヲ通ジタリケレバ、娘、世ニ愧シゲニテ、面打赤メタル気色、サワラバ落ル森ノ露、拾ハゞ消ナン様子ナリ。依テ、弥心迷ヒ、度々文ヲヤリシニ、返事ヲダニセズアリシガ、終ニハ、浮名ニ立ヌベシト、深く思ヒ入タル躰ナリ。日数重リテ、玉章モ、千束ニ積リケレバ、娘モ、上レバ下ル稲舟ノ、否ニハアラズト思ヘル気色、頓レタリ。サレドモ、互二人目ヲ、中ノ関守ニテ過

シケルガ、終ニハ節ヲ得テ、忍々ニ通ヒケリ。互ノ志モ、浅カラザリシ故、頓テ、男子一人出来ヌ。父母是ヲ聞テ、大二怒テ、勘当シタリケレバ、忍テ、自縁有ケル人ノ本ニ、隠レ居テ、年ヲ送ル有サマハ、彼、漢司馬相如ガ、卓文君ヲ具シテ、酒ヲ売シニ異ナラズ。尔レドモ、唯一人ノ娘ナレバ、父母モ、及ハテ免シ、此僧モ、若キ者ノミシテ、貌気高キ生付ナル上、サカノシク、手跡モ見事ナリケレバ、今ハ、養子ニコソセメト、一家相談事済、鎌倉工モ代官ニ上セ、物沙汰ナンドモ、サカノシクシケリ。孫又、形、誠二人々シク見ヘケレバ、寵愛シケル、子供両三人出来ヌ。此曹子、十三ニ成ケル年、元服ノ為ニ、鎌倉へ上ル。サマノ具足トモ用意シ、船数多仕立テ、渡海スル所ニ、風、烈シク、波高キニ、此子、船バタニ臨テ、誤テ、海ニ落入ヌ。アレヨノト云ドモ、沈テ見ヘズ。胸潰、周章騒クト思ヘバ、夢覺タリ。十五年ガ間ノ事ヲ、熟ト思ヒ続ルニ、唯片事ノ、眠ノ間ナリ。設、本意遂テ、樂ミ榮タリトモ、唯暫時ノ夢ナルベシ。悦ヒ事アルトモ、又悲ミ有ベシ迎、悟道發明ノ心地シテ、則チ、夫ヨリ熊野ニ還リ上リテ、勇猛ニ勤メケルトカヤ。

実トニ、三所ハ本地、弥陀薬師観音ナレバ、彼レヲ度セン迎、此夢ヲ見セ玉フナルベシ。

(『近世唱導集』、一部現行の字体に改め、捨て仮名を本文中に補った)

↓△「修行僧の長い夢」(『房総・民話撰』市原市、高滝、今富、土宇、佐是)

### 3 「嫉妬愛欲の心ふかき故指蛇と成て額に角生たる事」

(伝阿『女人愛執恠異録』、元文五・一七四〇年刊)

元久の比、鎌倉に三十歳計の後家、十五歳ばかりの娘老人もち、家富、家来あまためしつかひ、豊に暮せし者あり。その家来の内に、筋目ある者の子を、十歳の比よりもらひてぞだてたるあり。此者成長するに随ひて美目かたち美しく、ことに才覚者なれば、後家も取分不便がり、幼年より閨ちかく寝臥させけるゆへ、二十歳になりけれども遠慮なく傍にて召つかひけり。いっぞの比より後家と彼若き男不埒出来、一年も過ければ娘だにうさんに思ふ。まして家来共はひそくと噂する様に成ぬ。或時後家つくくと思ひけるは、「成長せる娘持ながら若き男といたづらせし事、さてくはづかしき事なり。此後はふつくとおもひきりぬべし。さて彼男は元来筋目正敷發明にて、此家の勝手も知りぬ。向後は娘と夫婦にして家をつがせ、わが身は隠居して心静に後世の勤めすべし」と、存じ極め、さて娘と若き男とをまねきて、心底を申せけり。若き男も娘も、母が只今までの様子知りたる上の事なれば、様々に辞退すれども、母余義なく申かば、兩人ともに、「此上はともかくも御はからひ次第」と申ゆへ、母よろこびて、吉日をえらびて婚札相ととのへ、家督もゆづり、其身は屋敷のかたはらに別家を立させ引籠り、こゝろやすく後世のつとめばかりして暮しければ、夫婦の孝行たぐひなく、日夜に幾度も見廻て馳走しけり。かくて一月程も過て、ある朝夫婦ともにいつものごとく隠居へ参りて、とやかくと咄など申出しけるに、返

事はすれども着物をかぶりてぬかず。「もはや朝飯の時分にて候へば、手水もなされよかし。如何渡らせたまひ候や」と、機嫌をうかゞへども、それもいやとて、何分にかぶりたる物をぬがず。夫婦ともに気毒がり、「何事にても御意にいらぬ事もや候。いかなる事にも、われくにつゝませ給ふべき事なし」とて、口説たて、泣かなしひ申ければ、その時母申けるは、「今は何をかくし申べき。有のまゝにいひきかさん。その方達がさまゝ辞退せしを、ぜひとひて夫婦にせしも、我こゝろよりをこりての事なり。家をゆづりて、これへ引込て十日二十日のほどは、さりとは世話もはなれ、こゝろやすくらしぬるが、此ごろに至りては、日々夜々に淋しく成に付ては、過し比まではかやうにてこそ暮せしなど、越方をおもひ出し、忘れんとすれどもわすられず。冤に付角につきて心ぐるしくねたましく成て、寝れども目もあはざりし。夜の明方手水つかひ、髪を搔なでければ、額口かみの中に手にさはる物あり。何やらんと鏡にうつし見ければ、芋のごとく成角式本はへたり。こはそもかなしやと、あきれはてけるに、指の先もつねと違ひたるやうに覚しゆへ、能々見れば、十の指の先、しだひく々にみな蛇のかしらに成ぬ。その方達に見せ参らするもはづかしけれども、兎角申され候に、左迄かくすべきにあらず。これ見給へ」とて、かぶりたる物をぬぎければ、額には角ふたつはへ、口は耳のきはまで切てすさまじき事、道成寺の面に似たり。十の指先はまことに蛇と成て、舌をびろくくと出しけり。夫婦の者、此有様を見て、おそろしきかなしき、兎角いふべきやうもなく、あまりに詮方なくて、夫婦共に髻を切、相知れる知識を請じ、出家の身と成けり。母も此体を見て共に剃髪染衣し、その後は居宅を寺とし、三人一所に昼夜念仏おこたらざりければ、一二月の内に母が角もそろくなくなり、十の指先も常のごとくになりければ、三人ともに悦びいさみ、日夜念仏おこたらざりければ、少宛(すこしづつ)の前後は有けれども、臨終には不思議なる事どもを感じ、目出度往生を送し事、古き伝記に見へたり。



一切の女人たち、かやうの事を見聞に付ては、かならずこゝろばへを慎み給ふべし。愛欲のこゝろさかんに起る時は、面々のゆび先蛇のかしらにはならぬか、心をつけて見る

べし。嫉妬のこゝろ烈しき角はへぬやと、折々さぐり見べき事なり。弁へもなき今までは、あしき事にてもあれ、それは過たる事、悔みても益なし。かならずしも此後は心でこゝろをいましめて、万事に付て慎しむべし。角はへ蛇に成ては、かなしき事なれ共、夢の間の今生は、それ猶ともかくもにて侍れども、死して地獄に墮して、幾万年の間か湯火の責にあひ、いかばかりの苦しみをか請ん。おそろしくかなしき事には侍らずや。是に付ても随分心をやはらかに一掃、慈悲心を第一とし、分相応に善根をなし、扱面々の宗旨くゝの勤方をばはげみ、仏の御慈悲にて今迄の罪科は御ゆるし下され、此生の終りには目出度浄土へ生ぜしめたまへと、朝暮ねんごろに頼み奉るべし。人身請がたく、仏教あひがたし。かならず後世の資料をおこたる事なかれ。

（叢書江戸文庫『近世仏教説話集成』二）

#### 4① 「道宣律師之②淨心戒勸云女人之十惡」 『女人愛執恠異録』

一、貪淫無厭（いんをむさぼりてあくことなし）

女人の淫欲をおもふ事、海の一切の大河小河の流れを、幾万年以前より今日迄吞どもつゝに飽ことなきがごとし。遂にあきたる事なし。美目男を見るたひには、幾万人でもあれ、どれとも交合したきとおもふ。昼夜片時も淫欲をわするゝ事なし。

二、嫉心如火（しつしんひのごとし）

家内に女人あれば、忌悪み、口には親切ぶりにいへども、心の中にはあたかたき様に思ふ。若わが夫としたしむ女人あれば、或は呪咀し、毒をもあたへたくおもひ、他を頼むみて殺して成とも、われ一人愛せられたくおもふなり。

三、詐親含笑（いつわりしたしみえみをふくむ）

人に逢時は、未物いはさるさきにまづわらひをふくみ、念比ぶりにいひて、こゝろには忌嫌ふ。他の男をおもひては、夫の旅行せん事をおもひ、或はやく死せよかしと願ふなり。

四、放逸無慚（ほういつむざん）

うつくしき衣類をほしがり、かんざし、くし、けしやうの具の能をねがひ、紅粉をぬり、

容かたちを作りて、他の愛念せんことをおもひ、姪欲に耽りては親類他人をわかつ事なく、後世は悪趣に入事をおそるゝ事なし。

五、口多悪業（くちあくごうおほし）

万事に付て虚言おほきゆへに、実の心底知れがたし。表向はじん常そうにして、影にては不義不埒の事を云に、母姉妹たがひに、さけはどかる事なし。他の上をそしる事、不随の事なり。

六、厭背夫主（ふしゆをえんばい）

もし美目よき男子を見ては、はぢも道理も打わすれて、何とぞして近付ん事をのみ思ひ、昼夜やすき心なく、すべき事をも捨置、氣むすばれては病ともなり、さてもし傍夫とした

しく成ぬれば、夫の家の財宝資具そろくと盗み出してつかはし、首尾よくば、夫をころして傍夫に添べき術のみをするなり。

七、心多誣曲（こころてんごくおおくして）

女人のくせとて、へつらいおほく、思はぬ事をも思ふ様にいひ、根性かだましきゆへに、言葉には念比ぶりをいへども、心は千里の外に隔たる。わが機にいらねば、よき人をもあしさまにいひ、夫に人と中たがいするも、大かた妻の取なし多し。

八、貪財忘恩（たからをむさぼっておんをわする）

父母の深き恩、ことばにもべかたし。やうく小づかひにてもする時分には、世上の習にて婚礼の取組あり。それに付ても支度物入こゝろづかひ、父母は昼夜安き心なし。さて夫の家へ行ては、夫ばかりにしたしみて、父母の恩は打わすれ、おやの物を貪りて、夫の家へ持運ぶに、父母おほくくれる時はよろこび、少き時はうらむ。父母身上おとろへて、飢寒する事有とても、わが着物壺つぬぎてあたふる心露程もなし。

九、欲火烧心（よつかむねをやく）

色欲の道には父母をもはぢず、只今切らるべき事もおそれず、いまだ婚姻せぬさきに孕みて、父母に恥を与へるもあり。わが機に入れば、筋目不相応の男とも、申あはせて欠落するもあり。嫁して後、はからざりき、夫早世すれば、日数もたゝぬに又嫁し度事ばかりおもひ、或は男女の子ども余程成長せる有に、それを捨おきて成とも、他へ嫁し度事のみをおもひ、或は下人など、不埒して世上の噂になるも、皆色欲盛にして恥を忘るゝゆへなり。

十、不淨常流（ふじょうつねにながる）

月水出産のけがらはしき事、たとへを取に物なし。女根の中に数万の淫虫あり。暑氣の節は虫と血とまじは雑り下り、臭穢更に似たる物なし。善神はいとひて悉くすて去給ふとなり。

此③十惡に因て、死しては必ず④三惡道に入て、永劫の間無量の苦を受て、解脱する時節なしといへり。⑤經に、三女人過患尽劫無説尽。經に、三十方国土有女人処則有地獄。經に、三途八難病宿食為根本、三途八難苦女人為根本云々。

つらく經論釈の中を見侍るに、⑥女人の過をとかせたまふ事、数かぎりもなき事なり。されば女人も後の御台のなどいへは、果報ゆゝしき様に聞ゆれども、罪過のかたをくらぶれば、乞食の男子にははるかに劣りたる事なり。⑦三世の諸仏にも見捨られ、⑧十方の淨土にも入られず、此粟散返土といへる小国の日本にてさへ、高野金峯比叡山書写山醍醐富士湯殿等の靈地は、女人絶て入事を免されず、⑨三途八難にあらざれば行べき所なく、

⑩六趣四生にあらざれば受べき形ちもなし。⑪たまく人間の生を感じ、稀に仏教に逢る甲斐もなく、かなしく恨めしきは女人なり。然るに西方の教主阿弥陀如来、是を不便におぼしめされ、一切の女人等、われだに見捨ば何の世にかうかむ瀬あらんと思召て、十方衆



生と誓ひたまへる⑫第十八の願に、男女ともにこもれども、殊に⑬第三十五の願を立させたまひしぞかし。愛欲の念さかんなるにつきても、いよく弥陀如来をたのむべし。嫉妬の心やみがたきに付ても、倍ますます西方浄土を願ふべし。心にはたすけたまへと念じ、口には唱へられ、次第に名号をとなへば、如来の本願力に乗じて、此生の終りには御来迎に抛り、必ず極楽へまいらむこと、何のあやぶみか有べき。かへすく信心相続して、念仏を怠る事なかるべし。

(叢書江戸文庫『近世仏教説話集成』二)

注\*\*\*\*\*

①道宣律師

隋・開皇一六年(五九六)〜唐・乾封二年(六六七)。麟徳元年(六六四)に終南山の浄業寺に隠棲したことから南山律師・南山大師とも称される。南山律宗の開祖。著書に『続高僧伝』など。唐代を代表する学僧。

②浄心戒勸

浄心誠観法のこと。道宣が門人に対し自修と教化の道を示したもので、浄心は心垢を除いて明浄ならしめ、誠観は過悪を離れて真理を諦察する意。口清心濁、外現威儀内起邪命、屏處造過など、人間の世相の通弊を衝き、人間心情の機微を穿つ。専ら実践の生活事相を尚ぶ著者の立場を見ることが出来る。ただし伝阿が依つたのは注釈書『浄心誠観發真鈔』(延宝八・一六八〇年刊)か。

③十悪

耳口意の三業で犯す十種の悪業。殺生、偷盜、邪淫(身業)、妄語、両舌、悪口、綺語(口業)、貪欲、瞋恚、邪見(異業)。『華嚴経』十地品には、これらの十悪の程度に応じて三悪道の何れかに墮す因とする。

④三悪道

地獄道、餓鬼道、畜生道のこと。三悪趣とも。

⑤経に…

誠観女人十悪如實厭離解脱法第十一 No.1893  
女人十悪者。具説難窮。今略言之令生厭離。

一者貪婬無量無厭。經云。十方國土有女人處即有地獄。一切障道此爲是苦。女人欲男如海吞流。百千萬劫畢竟不滿。得一望一。心意狂亂。見可意男悉願與交。猶火納薪多益多熾。晝夜行坐無忘欲時。受五道身皆女形攝。先際已來女根未轉。徹窮劫世不免女身。故名貪欲無厭

二者嫉妬心如毒蛇。家有婦類悉生憎垢。口似相親心如冤家。若同夫婿更相規命。或作符厭解奏毒藥。或雇人殺害。或截支節。或毀面目。或削衣食。鞭打罵辱。方便除他欲得獨立。

故名嫉妬。

三者諂曲詐親。凡見人時未語先笑。口云憶念心懷嫌恨。對於夫婿思他男子願夫遠行。或願早死。或與外人多種謀計。及見夫時諂媚附近。身向心背名為詐親。

四者放逸。但念綵衣裝粉釵釧。修治面目望他愛念。耽著五慾不避親疎。不畏後世畜生餓鬼名為放逸。

五者口多惡業。出言虛誑實情難得。凡所論說虛多實少。喜道鄙弊穢惡之語。母女姊妹不相避忌。兩舌鬪亂傳送消息。數作咒誓不畏殃報。屏罵尊長窮逐諍訟。是名口多惡業。

六者厭背夫主。若見端正男子無羞追逐。或遣信逼。或自身往坐臥。不安休廢生業。或結成病。或時託病屏處飲噉。人前不餐。夫婿辛苦勤勞得財。割減偷竊供給傍夫。共作謀計規欲殺害。見夫即瞋冤家無異。是名厭背夫主。

七者一切女人多懷諂曲實情難得。所以女人姦險性器難量。雖與對面共言心隔千里之外。皆為貪求世利性逐澆浮。言是返引為非。指虛翻將為實。顛倒常理每事多端。向背有無情隨冷熱。或憑勢要。或黨親知。或因財色相誣。或諍名位而起謗。是以口如脂膏。心若錐刀。

八者貪財不顧恩義。父母養育劬勞難報。及嫁得夫棄忘恩德。規父母物潤益夫家。多得便喜。不稱便恨。父母飢寒無心供給。是名貪財不顧恩義。

九者慾火燒心。不恥父母不懼刀杖。或未嫁妊身。或奔逐他逃。或拘引他人向家造過。恥辱父母。敗亂宗親。出嫁已後復叛夫婿。夫亡未幾更思後嫁。男女成人猶棄改出。心迷欲醉不避羞恥。女人過患窮劫難盡。故名慾火燒心。

十者女身臭惡不淨常流。春夏熱時虫血雜下。經云。女根之中二萬姪虫。形如臂釧細若秋毫。腥臊臭穢。私墮胎孕。懷妊產生污穢狼藉。善神見聞悉皆捨去。惡鬼魍魎數來侵擾。如是鄙弊愚人猶貪棄捨念處破佛淨戒。死入獄中畜生餓鬼長劫受苦無解脫時。是名女人十種惡業。能觀能遠名為淨心。偈曰

④ 四百四種病 宿食為根本

⑤ 三塗八難苦 女人為根本

生死無數劫 貪愛為根本

賢聖解脫樂 離欲為根本

四蛇成身界 顛倒想為心

膿血遍九竅 淨想起貪姪

順情稱快樂 不信墮刀林

報生猪狗道 由前貪愛深

一切女人性 少實多諂曲

不念臭穢身 坐臥思念欲

邪視他男子 情喜相逼觸

百千萬億劫 畢竟不滿足

不羞慚父母 敗損諸親族

男少女多者 家衰數被辱  
女具十惡業 死入鐵床獄  
大錘刺女根 苦痛大嗥哭  
地獄罪畢已 轉入母猪腹  
噉糞居團廁 臭泥生溷虫  
復被屠割苦 累劫罪難終  
從畜入餓鬼 穢食恒不充  
支節皆火然 骸骨不消融  
貪欲暫時樂 受報苦無窮

#### ⑥ 女人の過

『毘奈耶雜事』七には「女人は大黒蛇の如く、五つの過りがある。即ち、瞋りやすく、恨み多く、悪を作し、恩を忘れ、毒を持つ（如大黒蛇有五過患。云何爲五。一者多瞋。二者多恨。二者作惡。四者無恩。五者利毒。」とあり、『正法念処經』四五には婦女の心を例えて「屎の如く、毒の如く、利刃の如く、悪毒蛇の如きである（如是婦女。如屎如毒。亦如利刀。如墮嶮岸大火曠野。惡毒蛇等一切相似。婦女之心悉皆如是。」と説く。

なお、近世の浄土宗における学則『蓮門学則』（成立年不明、文政一〇・一八二七年に刊行され流布）には「恐ル、事、毒蛇天魔ノ思ヒヲナスベシ」と出家の他淫という行為そのものを毒蛇と見なして慎むよう制定されている。

#### ⑦ 三世諸仏十方浄土

過去・現在・未来の三世に在すもろの仏陀の総称。また十方法土は法における空間的な普遍性。般若經典など種々の大乘經典において「現在十方諸仏」や「十方三世諸仏」と説かれる。

#### ⑨ 三途八難

八難はさとりを得るうえでの八種の困難。一、地獄道に生ずること、二、畜生道に生ずること、三、餓鬼道に生ずること、四、長寿天中に生ずること、五、辺地無色無仏法の処に生ずること、六、邪見にして顛倒心を懐くこと、七、感覺器官が不自由であること、八、仏に値遇せず梵行を修行しないこと（正藏一・五五下）。『無量寿經釈』（法然）に、「何に況や女人の身は諸經論の中に嫌われ、在在所所に擯出す。三途八難に非ざれば趣くべき方も無し」（昭法全七七）とある。

#### ⑩ 六趣四生

六趣は六道。四生は有情の四種類の生まれ方。すなわち卵生・胎生・湿生・化生。  
⑩ たま〜人間の生を感じ、稀に仏教に逢る

三帰依文「人身受けがたし今已に受く 仏法聞きがたし今已に聞く」（『華嚴經』第六、淨行品第七）

#### ⑫ 第十八願

「たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと

欲して乃至十念せん。もし生れずんば、正覚を取らじ。ただ、五逆と正法を誹謗するものを除かん」(『無量寿経』、岩波文庫『浄土三部経』上)

⑬第三十五願

「たとい、われ仏となるをえんとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界、それ女人ありて、わが名字を聞き、歡喜信樂し、菩提心を発し、女身を厭惡せん。(その人)命終りてのち、また女像とならば、正覚を取らじ。」(『無量寿経』、岩波文庫『浄土三部経』上)

5 『談義もとり』(慈泉洞空、元禄三・一六九〇年刊)

慈泉は他に『女人往生章』を著す、弟子に『善惡因果集』の蓮盛▽しかるにその女は智恵利根深入諸法とてよのつねの女人にはあらず。薬王品の女人も又▽しかなり。もし理觀なくは如説の行にあらずと釈して觀心明了の女人にあらずは。かの法によりて往生をうる事あたはず。しかるに末の世の女人はその性ことにひがみてひたすらをのがかたちに著し。おのこのために愛せられん事をのみ思ひて。更に仏道のふかきこと▽はりをしらず。千生万世をかゆともいかてか女身をあらたむる事をえんや。弥陀の本願▽かく此匹をあはれみまして。をのがあさましき女身をいとひ我かたえなる本願に帰して。おこたらす名号をとなへは臨終の時女身をかえて我が国に生せしめん。若しからずは我も成仏せまじとちかことしたまひしに。つゝに成仏しましませは。女人の往生又うたかひなし。風雅集に此▽を

こと浦にくちて捨たるあまをふね我か方に引なみもありけり。とよめり。誠に罪業いとふかく成仏のうつはにあらざる事くちたる舟のごとくして。十方浄土のことうらにすてはなたれ生死の海にたゞよひよるかたもなき身なれども。唯みだほとけひとりのみ。なをさりともとすてはて給はで。ふかきちかひの波もてわか方とてみち引給ふ事のかたしけなさ又何にかは似ん。男子の往生よりはとりわき仏の御慈悲をふかくかふりぬるは女人ぞかし。いかてかおろそかに思ひんや。新千載に徽安門院の御歌とて

頼むぞよ五つのさはりふかくともすてぬ仏のちかひひとつを。ふた心なく此ちかひを頼▽てもはら名号をとなへなは。五障の雲称名の語風に散し三従の堀念仏の法水にきよむへし▽など語り給へるに。むかひよりむらがりて来る談義もどりの中にまぎれてかの老僧を見うしなひぬ▽ (『大惣本稀書集成』第十五卷)

【参考】

新纂浄土宗辞典 WEB版

仏教比喻辞典

佛書解説大辞典

經典の引用について、特に注記のないものは SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース 2018 版 によった。